

K U M A M O T O A R T P O L I S N E W S

vo1.39

I N D E X

●くまもとアートポリスシンポジウム

これからのアートポリス 自然に開き、人と和す

●新規プロジェクト

天草市本庁舎

高野病院

●完成プロジェクト

熊本県立球磨工業高等学校 管理棟

和水町立三加和小中学校

●プロジェクト進捗

和水町立菊水小中学校

天草アーバ建築塾

●人材育成事業

東北支援「みんなの家」プロジェクト

●トピックス

第19回くまもとアートポリス推進賞

くまもとアートポリス見学バスツアー

くまもとアートポリス視察状況

既存プロジェクト情報

海外巡回展

これからのアートポリス 自然に開き、人と和す

基調講演 1 自然に開き、人と和す

くまもとアートポリスコミッショナー
伊東 豊雄 氏

建築家
作品=八代市立博物館、せんだいメディアテーク、
2009高知ワールドゲームズメインスタジアムほか
受賞=日本建築学会賞作品賞(1986、2003)、
ヴェネチア・ビエンナーレ金獅子賞(2002生業業績部
門ほか)、プリツカー建築賞(2013)ほか



今年は25周年という大きな節目で、新しいKAPを踏み出す年である。そこでKAPのテーマを「自然に開き、人と和す」とし、これからのKAPの可能性を更に広げていきたい。



東日本大震災が起きてから2年(平成25年6月現在)、被災地に通いながら、被災地でやらなければいけないこととKAPでやっていくべきことが自分の中でつながった。「みんなの家プロジェクト」を経ながら、近代主義の建築とはどういうもので、何が課題かを考えている。被災地にある仮設住宅は鉄骨系のものが多く、個々のプライバシーが最優先された建築となっている。一つひとつが均等でならなくてはならない、平等主義の建築だ。この考え方こそが、建築をおもしろくなくしているのではないかと感じる。公営住宅やタワーマンションなどにも近代的建築の特徴が挙げられる。隣に住む人が誰か分からない、プライバシーが強調されすぎた「閉じた空間」となっている。

また、自然との間に関係をもたない建築が多い。外との関係を断ち切ることで、人工環境がつくられ、快適な空間を設定しやすいからだ。

はたしてそういった建築が被災地や現代求められているものなのか。もっと「自然」に開かれ、人のつながりを生み出すような建築を目指していくべきだと考えている。今回のテーマ「自然に開き、人と和す」は、近代建築とはまったく逆の考え方。自然に対して開き、人とつながっていくことこそが、KAPの新しい可能性をひるげる、目指すべき建築ではないだろうか。

基調講演 2 家から世界が変わっていく

グラフィックデザイナー
原 研哉 氏

グラフィックデザイナー/武蔵野美術大学教授
作品=長野オリンピック開・閉会式プログラム、
無印良品のアートディレクション、代官山TSUTAYA
書店VI及びサイン計画ほか
受賞=毎日デザイン賞(2000)、亀倉雄策賞(2000)、
東京ADC賞グランプリ(2003)、
サントリー学芸賞(2004)ほか



自分にとってのデザインというのは「みなさんの目を覚ます」ものだ。身の回りにある、あらゆるものがデザインであり、様々な人間の知恵が外界環境をつくるために結集してきた。そういった知恵への気づきが増えるほど、世界や社会はよくなっていくのではないか。私自身、ハウスビジョンや無印良品、ハイテクノロジーや価格の事を考える、日常の中に隠れている生活の気づきを発見していく中で様々なことに気づかされた。

デザイナーは色々な仕事をする。様々なことを同時に行うことで、そのものが見えなくなったり、逆に新たな可能性が見えてきたりと色々だ。その物事の可能性を可視化していくことがデザイナーの役割ではないかと思う。

日本はそろそろ変わらないといけない。0度以下になっても凍ることのなかった水が、少しの衝撃で一気に変容するように。過冷却状態だった日本も震災という衝撃を受けて変わっていきように感じる。家から世界が変わっていくというのは少しおおげさだが、一人ひとりが、何か小さなことに気づいていくことで、世界は変わっていくし、日本にはその変革の可能性がある。



●KAPロゴ

そこに人に集まってくる、参加したくなるような楽しさ、温かさがそこにあるような形をデザイン。熊本の「K」をイメージし、「K」が動いているようなデザインにすることでKAPが生きて動いていること示唆させるデザインとした。

くまもとアートポリス(KAP)が25周年という大きな節目を迎え、新テーマ「自然に開き、人と和す」のもと、KAPの新たな展開と可能性を探るシンポジウムを平成25年6月16日、熊本県庁にて開催した。

テーマを「これからのアートポリス 自然に開き、人と和す」とし、熊本県土木部建築住宅局長生田博隆の開会挨拶に続き、KAPコミッショナーである伊東豊雄氏とKAPの新しいロゴをデザインした原研哉氏による基調講演が行われた。

その後のパネルディスカッションは、KAPアドバイザーの曾我部昌史氏をコーディネーターに、伊東コミッショナー、原氏、宇土市立宇土小学校の設計者である赤松佳珠子氏をパネラーにもかえ、「自然に開く」「建築のありかた」に焦点を当てながらこれからのKAPの可能性について討議が行われた。また、新テーマのもとで実施するKAP事業の第1号となる新規プロジェクト「天草市本庁舎」が安田公寛天草市長より発表されるなど、KAPの新たな可能性を感じさせるようなシンポジウムとなった。

パネルディスカッション

KAP、新たな展開と可能性

■コーディネーター

曾我部 昌史 氏

くまもとアートポリスアドバイザー



■パネリスト

伊東 豊雄 氏

くまもとアートポリスコミッショナー

原 研哉 氏

グラフィックデザイナー

赤松 佳珠子 氏

CAt(シーアンドエイトウキョウ)



パネルディスカッションは、伊東コミッショナー、原氏、CAtの赤松氏をパネラーに、曾我部アドバイザーがコーディネートする中で進められた。「自然に開いた建築」とはどういうものか、赤松氏の宇土小学校についての紹介からパネルディスカッションはスタートした。そこから、KAPの考え方や発信の仕方について意見が交わされた。また新規プロジェクトである「天草市本庁舎」の考え方についても話が聞かれ、これからの新たなKAPに視点を向けた討議内容となった。



《曾我部》

「自然に開いた建築」というものは、宇土小学校のようにテクノロジーによって自然に近づけることができる。KAPを外に発信していくことで、この価値を先につなげていきたい。

《赤松》宇土小学校の設計は、子どもが自然の中で学習し、気持ちよく過ごせる場所をといて進めてきた。技術の進歩を利用し、より自然の風が吹き込んでくるようなつくりにした。建物そのものとしての役割はもちろん必要だが、その場所ならではの、人にとってきもちの良い場所・わくわくする場所を考えた上で、建物の機能を考えるのが理想的。

《伊東》そのとき人が居たい空間をつくるのが建築課の役割ではないか。KAPが存続していくにはどうすればいいのか。これまでのKAPは「学びつつ創る、創りつつ育む」をテーマに地域の人と一緒になって考えることを大切にしてきた。これからはそこから更に一歩踏み出し、ここには都市にない新しい建築があることを発信していくことが必要ではないかと思う。

《原》ただ建物の姿を発信するのではなく、動画を使用し、そこで子どもが動き回っていく姿を上手く見せられればいいのではないかと。生きて動いていく建築を上手く世界に発信していくことが、KAPの可能性を広げていくきっかけになるのではないかと。

天草市本庁舎建設にける想い

(天草市長 安田 公寛)

新庁舎建設にあたっては、くまもとアートポリスに参加することで、庁舎機能の充実を図ることはもちろんのこと、地域の拠点となり後世に残るような素晴らしい建築物を造ってきたい。

新テーマ「自然に開き、人と和す」のもとで実施するアートポリスプロジェクト第1弾として、天草市本庁舎プロジェクトが始動した。天草市の新市づくりの基本理念である『日本の宝島“天草”の創造』の実現に向け、住民の誰もが誇りに思う「天草市」の宝を輝かせるための、まちづくりの拠点となる新庁舎の具現化を目指す。

プロジェクトの設計者を選定するため、公募型プロポーザルを実施したところ、全国からレベルの高い8件の応募があり、一次審査(非公開)で二次審査に進む5者を選定した。平成25年9月22日に天草市民ホールで公開により実施した二次審査では、多くの天草市民や建築関係者が見守る中、「山本理顕設計工場」が最優秀賞を受賞した。

また、本プロジェクトでは、天草市の地域性や歴史に特に配慮し、市民や職員等の庁舎利用者の声を設計に十分に反映させていくため、最優秀賞受賞者である「山本理顕設計工場」と県内の建築士事務所「GMTくまもと(風設計室+IGA建築計画+廣田建築・都市設計工房+フジモトミュキ設計室)」が連携して設計を進めていく。

最優秀賞 山本理顕設計工場



最優秀賞を受賞した山本理顕設計工場の皆さん

評価のポイント

山本理顕設計工場の提案は、自然エネルギーを利用した設備計画など総合的に練られたものだった。特に将来にわたって市民と行政が協働しながらまちづくりに取り組むためのクラブハウス・アンテナショップや小さな会議スペースなどが随所にちりばめられた提案は「日本の宝島“天草”」にふさわしい新鮮な市庁舎の誕生を期待させる内容だった。

本庁舎建築を通じて、市民が自ら育つことで市が生まれ、また市民と行政が共同していく新しいあり方を具現化していくことへの可能性を感じ、最優秀賞として選んだ。

※ 模型やパースは、プロポーザル時点のものであり、今後、設計が進む中で変更させる可能性があります。

GMTくまもとが中心となり、合併前の旧2市8町単位で地元説明会を開催し、まちづくり協議会等からの意見を設計に反映させていく。



地元住民への説明会の模様



多くの参加者が見守る中、審査が行われた。提案内容を模型で確認する伊東審査員長



優秀賞



梓設計+SUEP.

佳作



株式会社 都市環境建築設計所



現代計画・野沢建築工房設計共同体

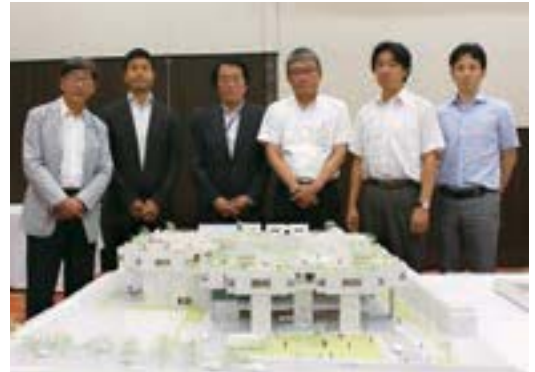


新居千秋都市建築設計

民間施設として、くまもとアートポリス5件目のプロジェクトとなる医療法人社団高野会 高野病院の事業がスタートした。日本一の大腸肛門専門病院を目指し、地域医療に貢献してきた高野病院。大腸肛門病の「急性期・専門病院」として更に発展させ、将来にわたって永続的に地域医療に貢献していくための病院づくりを目指す。

設計者の選定にあたっては、民間プロジェクトとして初めて公募型プロポーザル方式を採用した。一次審査（非公開）では全国から応募のあった11件の中から二次審査に進む4件を選定し、平成25年8月20日に公開による二次審査を実施したところ、くまもとアートポリス初の医療施設ということもあり、建築関係者に加えて多数の医療関係者が参加する中で、「共同建築設計事務所+コンテンポラリーズ」が最優秀賞を受賞した。

最優秀賞 共同建築設計事務所+コンテンポラリーズ



最優秀賞を受賞した共同建築設計事務所+コンテンポラリーズの皆さん



評価のポイント

※ 模型やパースはプロポーザル時点のものであり、今後、設計が進む中で変更させる可能性があります。

様々な視点からの議論の末、全員一致で最優秀案として「共同建築設計事務所+コンテンポラリーズ」の提案を選出した。大腸肛門病院という特性上、審査では病院サイドとアートポリスサイドの議論に議論を重ねた結果となった。

最優秀賞を受賞した、共同建築設計事務所+コンテンポラリーズの提案は、高野病院が想定していた建物の高さよりも低い設計だったが、構造の考え方、準個室化としての4人部屋の提案、全体的に1層2層の階高を高くし、その下に増築が可能性を持たせていることなどが評価され選出の要因となった。

佳作



株式会社 内藤建築事務所九州事務所



株式会社 岡田新一設計事務所



久米・シーラクスK&H設計共同企業体

完成プロジェクト

～奥へと人を誘う「木の洞窟」～

蜂の巣のように六角形を組合せた平面形式に沿って建ち上げ、角度をもって頂点に集まる壁柱が空間を緩やかに分節するとともに、三角形の開口部を通してさまざまな方向への連続性を生み出す。これにより迷路のように広がる洞窟のような独特な内部空間を実現した。内部には瑞々しい木の清涼感があふれ、壁柱の三角形頂部からは天空光が射し込み、開口部からは風が通り抜ける。



設計者



高橋 晶子
(ワークステーション)



高橋 寛
(ワークステーション)



濱田 裕史
(モードフロンティア)



秋嶺 宣治
(秋嶺一級建築士事務所)

熊本県立球磨工業高等学校 管理棟 DATA

構造・階数 木造一部鉄筋コンクリート造 2階建て
発注者 熊本県
設計者 ワークステーション+モードフロンティア
+秋嶺一級建築士事務所
施工(建築) 味岡・速永建設工事共同企業体
竣工 2013年7月

●完成見学会

平成25年7月26日、球磨工業高校管理棟の完成見学会が開催された。建築関係者をはじめ、大学生など若い方も多く200人を超える参加者に恵まれた。設計者や構造担当者の話を聞きながらの見学会に参加者は熱心に耳を傾けていた。見学会はスライドを使用したガイダンスと管理棟内見学の2段階で行われ、充実した見学会となった。



会議室でガイダンスを受ける参加者



設計者の説明を聞きながら管理棟内を見学

和水町立三加和小中学校

三加和小中学校は、既存の中学校敷地内に3つの小学校を統合した校舎を併設し平成26年4月に開校予定の小中併設型の学校である。平成23年に公募型プロポーザルの公開審査を開催し、約1年間の設計期間を経て、平成24年12月に工事着手し、平成25年12月に竣工した。



熊本県立球磨工業高等学校 管理棟

球磨工業高等学校は、全国で唯一の伝統建築専攻科を有する高等学校で平成25年10月に創立50周年を迎えた。その管理棟が、平成23年に公募型コンペの公開審査により設計者を決定、約1年間の設計期間を経て、平成24年7月に着工し、平成25年7月に竣工した。



新設の小学校校舎と屋内運動場は、700㎡もの地元産材をふんだんに用いた木造平屋。校舎は束ね重ね材の壁パネルと方杖を用いた構造形式によりスパンの異なる諸室を構成している。屋内運動場は21mの短編方向スパンを束ね重ね材による木組みのアーチを23ユニット並べて、迫力ある大空間を創り出している。

校庭との約1.2mのレベル差を活用し、既存の中学校校舎から階段とスロープを用いて新設の小学校校舎をつなげて教室が配置されており、子どもたちが楽しく元気に活動できる空間を生み出している。

和水町立三加和小中学校 DATA

構造・階数 木造 平屋建て
発注者 和水町
設計者 NNSH
施工(建築) 本山建設(木造校舎)、
三和建設(屋内運動場)、
宇都宮建設(中学校改修等)
竣工 2013年12月



設計者



野沢 正光
(有限会社 野沢正光建築工房)



中村 享一
(一字一級建築士事務所)



柴田 真秀
(有限会社 UL設計室)



東大森 裕子
(東大森裕子時空間設計室)

●完成見学会

平成26年2月18日、完成見学会を開催した。主に建築関係者(建築士、建設業、学生等)の約150名が参加し、設計者の説明に熱心に耳を傾けた。



解放感のある廊下を回る参加者



階段状のエントランスホールで説明を受ける参加者

■ 和水町立菊水小中学校 進捗状況

菊水小学校は、4つの小学校と中学校の校舎を併設する新設の小中併設校。平成24年の公募型プロポーザルの公開審査において決定した設計者の龍+いるか+西山設計集団(内田文雄、吉村雅夫、西山英夫)により、約1年半の設計期間を経て、実施設計が完了した。設計にあたっては、ワークショップ等を通じて地元住民や関係者の声を聞きながら、地元材をふんだんに活用した自然と共に生きる木造校舎となった。

設計者



内田 文雄

(株式会社 龍環境計画)



吉村 雅夫

(株式会社 いるか設計集団)



西山 英夫

(西山英夫建築環境研究所)



ワークショップ風景



完成イメージ模型

完成イメージパース



■ 「天草アーバ建築塾」閉塾式

平成24年7月にスタートしたプロジェクト「天草アーバ建築塾」が平成25年9月23日に幕を閉じた。アートポリスの第88番目のプロジェクトは天草市有明町のリップランド公園内に休憩スペースとその周辺を整備するもの。「天草アーバ建築塾」として、伊東コミッショナーを塾長に、県内外から応募のあった塾生18名、聴講生17名により進められた。閉塾式では、天草アーバ建築に至るまでの経緯の発表や、建築塾を通しての各々の想いが語られ、塾生1人ひとりに終了証書が手渡された。

授与式の後は、「天草アーバ」で記念撮影。塾生からは「将来子どもができれば、一緒に来たい」「通りかかる人がふとした時に休まれる場所になれば」といった声が聞かれた。

修了証書を受け取る塾生



天草アーバの前で記念撮影



「みんなの家」の今

平成23年3月11日に起きた、東日本大震災により、家を失ったり避難されている方々に精神的な安らぎを感じられる空間「みんなの家」を提供するプロジェクト。伊東氏の提案を受けた熊本県は、アートポリスの人材育成事業として位置づけて、県内建築関係団体や学生などのボランティアと連携しながら取り組んできた。

そのプロジェクトの第1段となった「仙台市宮城野区みんなの家」。完成からおよそ1年たった「みんなの家」が今どうなっているのか。今後のくまもとアートポリスのあり方について考えるために、平成25年10月28日(月)-29日(火)に伊東コミッションをはじめ、桂アドバイザー、末廣アドバイザー、曾我部アドバイザー、熊本県職員で仙台を訪問した。

今回の視察では、仙台市宮城野区みんなの家の他、岩手県や宮城県にある8件の「みんなの家」を訪問。実際に利用している人、地域の人々の話を聞くことで「みんなの家」の現状を知る事ができ、あらためて「みんなの家」の必要性を確認することができた。



仙台市宮城野区みんなの家

一日目

1. 岩沼みんなの家(宮城県岩沼市)
2. 東松島市宮戸島みんなの家(宮城県東松島市)
3. 東松島こどもみんなの家(宮城県東松島市)
4. 仙台市宮城野区みんなの家(宮城県仙台市)



東松島こどもみんなの家



岩沼みんなの家



東松島市宮戸島みんなの家

KAP事業



仙台市
宮城野区
みんなの家

二日目

5. 気仙沼みんなの家(宮城県気仙沼市)
6. 陸前高田みんなの家(岩手県陸前高田市)
7. 釜石市平田地区みんなの家(岩手県釜石市)
8. 釜石市商店街みんなの家(岩手県釜石市)
9. 釜石漁師みんなの家(岩手県釜石市)



気仙沼みんなの家



陸前高田みんなの家



釜石市平田地区みんなの家



釜石市商店街みんなの家



釜石漁師みんなの家

推進賞

質の高い優れた建造物を顕彰することにより、県民の環境デザインに対する意識の高揚と都市環境並びに建築文化等の向上、併せて豊かな地域づくりを図ることを目的とした「くまもとアートポリス推進賞」。第19回目となる今回は、県内外から質の高い多数の応募があり、推進賞2作品「大江の舎/親誼書房」、「T邸」、推進賞選賞6作品「風と共に」、「中九州クボタ本社・物流センター」、「南阿蘇原眼科」、「光陰Archive/長洲の家」、「坪井の家」、「渡邊総合内科クリニック/高森わたなべ薬局」を選出した。



■ T邸 (熊本市) 設計者: 大森 創太郎 (大森創太郎建築事務所)

延べ床28坪の住宅だが、庭と吹き抜け、統一された和の色調によって、十分な広がりを生み出し、施主の豊かで上質な暮らしぶりが目に浮かぶ。



■ 大江の舎/親誼書房 (熊本市)

設計者: 小材 健治 (ばん設計小材事務所)

施主の父が残した二万冊の蔵書を引き継ぐことで得られた時間的な価値を空間体験で感じられることがこの作品の魅力であり、それを施主と建築家がともに作りあげたことが素晴らしい。

くまもとアートポリス見学バスツアーを開催!

TOPICS

平成26年2月23日(日)、くまもとアートポリスへの理解を深めてもらうため、アートポリスプロジェクトや青井阿蘇神社などを見学するバスツアーを開催。小学生からご高齢の方まで幅広い世代の方々37名が参加した。普段見る機会の少ない小学校や高校の中をカメラ片手に積極的に見学していた。「こんな校舎で勉強がしたかった」「普段見ることのできない場所も見ることができてよかった」「くまもとアートポリスについて知ることができてよかった」などといった感想が聞かされた。



▲宇城市立豊野小中学校(宇城市)



◀県立球磨工業高等学校管理棟(人吉市)



▲青井阿蘇神社(人吉市)



県立球磨工業高等学校加工組立室棟(人吉市)

アートポリス視察状況

TOPICS

今年度は、国内外から約350名もの人が視察に訪れた。特に、国内(学生、地方議会関係者等)視察者が増加傾向にあった。



農業大学校学生寮



阿蘇みんなの家(高田住宅)

推進賞選賞



風と共に (人吉市)
設計者: 西森 晃 (現代建築研究所)



光陰Archive/長洲の家 (玉名郡長洲町)
設計者: 倉田 耕次 (有限会社倉田設計)



中九州クボタ本社・物流センター (菊池郡大津町)
設計者: 入江 雅昭 (IGA建築計画)



南阿蘇原眼科 (阿蘇郡南阿蘇村)
設計者: 小材 健治 (ばん設計小材事務所)

**渡邊総合内科クリニック/
高森わたなべ薬局 (阿蘇郡高森町)**
設計者: 後藤 欽也 (株式会社後藤横浜事務所)



坪井の家 (熊本市)
設計者: 柏原 貴智 (blueveda)
西山 英夫 (HNAA)



既存プロジェクト情報

TOPICS

牛深ハイヤ大橋耐震改修

竣工から約17年が経過する「牛深ハイヤ大橋」(設計/レンゾ・ピアノ+ピーター・ライス+岡部憲明+マエダ)が耐震改修されることとなった。改修方法等については、設計者の一人である岡部憲明氏にも意見を伺いながら、魅力を損なうことなく、後世に残していくための最良策を検討している。

牛深ハイヤ大橋 (Photo by 石丸 捷一) ▶



三角東港広場景観整備



観光列車の運行により、利用客が増加してきている三角東港において、「三角港フェリーターミナル(海のピラミッド)」(設計/葉祥栄)を囲む広場の景観整備が進められている。

くまもとアートポリス海外巡回展

TOPICS

日本の伝統や文化を海外へ紹介するために国際交流基金が実施している海外巡回展。そのテーマの一つとして、くまもとアートポリスが取り上げられており、今年度は、トンガ、マケドニア、ヨルダン、アイルランドの4カ国で開催された。

【平成25年度巡回展実績】

- 2013.7.26~8.13
トンガ/ヌクアロファ
- 2013.9.23~10.4
マケドニア/スコピエ
- 2013.11.24~12.12
ヨルダン/アンマン
- 2014.3.4~3.25
アイルランド/ダブリン



マケドニア会場風景
(Photo by Galina Strachkova)

~KAP情報(平成26年3月末時点)~

TOPICS

- 参加プロジェクト 90施設 (竣工80、設計完了1、設計中2)
- 直近の受賞歴 日本クリエイション賞(KAP,2013)
村野藤吾賞・日本建築学会作品選奨 (宇土小学校,2013)
BCS賞(網津小学校,2013)
推進賞 51作品、推進賞選賞 75作品
- KAP推進賞

- 特別講座
伊東コミッショナーが
球磨工業高校の1年生を
対象にKAPについて講義





くまもとアートポリスロゴ デザイン

グラフィックデザイナー 原 研 哉 氏

背景に熊本の頭文字Kをあしらったグラフィックパターンを配し、視覚的に強いアイデンティティを生み出します。運動性のある黄色のパターンで、見る人の注意を強く引きつけ、ロゴを目にする度に、くまもとアートポリスに新たな変化や動きがあることを感じさせます。

発行

くまもとアートポリス事務局 (熊本県土木部建築住宅局建築課内)

〒862-8570 熊本市中央区水前寺6-18-1

TEL096-333-2537 FAX096-384-9820

e-mail kenchiku@pref.kumamoto.lg.jp

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/artpolis/>

発 行 者:熊本県
所 属:建築課
発行年度:平成25年度